

コ ラ ム

根津猫春幻想 (ネツノネコハルノサッカク)

大谷 正夫 (協同総研顧問)

根津権現境内に捨てられた根津猫は、食べ物には何不自由なく丸々と太っていた。

何せ境内には食事処や一杯飲み屋もあり、その残飯と参拝客のなげてくれる食事ですらいつも満腹していた。夕方ともなれば門前の根津遊郭の苦界に身を沈めたおねえさんたちが、好物の魚の切り身を「階から投げたからだ。冬近く、根津猫は日だまりにまどろんだ。

時は元禄から宝永(1700年代)で、犬公方(イヌクポウ)といわれた徳川五代將軍綱吉(ツナヨシ)の時代から、六代將軍家宣(イエノブ)の時代が近づいていた。

悪法の生類憐れみ(シヨウルイアワレミ)の令は江戸町民の怨嗟のまどだった。はじめは動物愛護的な性格もあったが、やがて狂気の沙汰といえる性格をおびてきた。犬は人間よりも大事にされ、犬に無礼をはたらけば、遠島を申し付けられたり、時には犬侍に斬られもした。犬は育てられ方により自分が主人であると思ひこむ。根津猫はその犬の横柄な態度が全く気に入らなかった。同じ生類なのに、どうして犬と猫はこんなにも、天と地ほどの差別を受けねばならないのか。彼らはたつぷりと餌を与えられ、あまつさえ立派な小屋まで建ててもらっている。一度や二度、境内に迷いこんだ子犬に威嚇をし、震え上がらせたことで溜飲を下げたこともあった。考えてみれば人間はあらゆるものに常に差別をもちこみ支配を強化しているのだ。良く考えれば、犬ではなく人間が悪いのだ。

ところで参拝客の話が気になった。世の中が大きく変わるということだった。

全国で天災地変が続出していた。大火、地震、津波をはじめ民百姓の生活は困窮の度を高め、あまつさえ富士山も大爆発した。

全国で飢餓が発生した。一揆も起き、幕府は改革を迫られていた。根津神社は將軍の産土神(ウブスナガミ)として手厚くまつられていたので、そこまでの詳しい情報は猫には届かなかった。しかし生類憐れみの令は必ず廃止されるという噂だった。

根津猫は考えた。これは猫にとって良いことなのか、それとも悪い知らせなのか。

あの憎い犬どもが特別に保護されなくなるのだし、そうすれば、犬と同等に扱われるのだ。これが吉兆でなくて何だ。

その頃、家宣が將軍となり、直ちに悪法は廃止された(1709年)。根津猫は浮き浮きと境内を出た。今日はいい気分だ。少し速いところで昼寝だ。

うとうととしていると”泥棒猫”と罵声がとび何やらものが飛んできた。あわてて境内に戻った。また人間だ。その時、夢から覚めた。時は宝永ではなく平成14年だったのだ。

このところ入院、通院を重ねてお世話になっている文京区のN医科大学の目と鼻の先の根津神社の優雅な神殿に魅了され、度々訪れている。現在では表門から裏門まで歩いてもたいした距離ではなく、病人にとっても格好の散歩道だ。境内には鳩とたわむ

れる幼稚園児、ベンチで昼食をとる老夫妻、犬の散歩の人々、社の山門や拝殿を描く画学生達、そして病院の行き帰りに快癒を祈る人々。そして直ぐ隣の看護婦寮からの白衣の天使。5月にはつつじまつりで賑わう。

そんな中で私は境内の一匹の猫と仲良しになった。それが根津猫だ。

しかしここは都会のど真ん中でありながら不思議な空間を形づくっている。時間がゆっくりと流れている感じがし、上記のような歴史を遡ったような瞑想にふけることもできるのである。

根津神社を出ても、町はしっとりとしている。大通りはビルが増えたが、一本小道に入ると、静かな世界が広がる。ここは文豪の森鷗外、夏目漱石、など多くの文人の住んだ町でもある。

マンションなども建ちはじめているが、古くからの町並みが続き、スーパーなどもなく、古い大都会の中のコ・ミュニティの原形のようなしっとりとした雰囲気を出している。

この根津界隈を、作家の森まゆみさん（コミュニティ誌『谷根千（ヤネセン）』の編集長）は『不思議の町 根津』の中で「思うようにいかない人生、愚かしさややるせなさ、抑圧されても諦めきれない人間の業。それでも生活の細部を大事にした時代の一つ一つ、ものをいとおしんで近代合理主義として流し去ってしまった水のうちやはりーすくいはそれがなくては人間は生きて行けないのだ」と書いている。

さらに人間の住むところは、日照、通風、下水道、緑被率以外にも必要なことが山ほどある。幼なじみがいる、町中での冠婚葬祭、風呂屋、行きつけの飲み屋、元気のいい八百屋、自慢しあう植木鉢、風通しのよい神

社の境内、ここで死ぬまで住みたいという町でなくてはならない。そして何よりも扶け合いの気風にみちたところではなれないと言う。それがここにはあるらしい。

根津のコミュニティは東京の古い下町、歴史と文化の、息吹くところなのだ。

コミュニティと言っても日本全国一様ではないのは当然のことだ。ここはアパートの立ち並ぶ新興住宅地や、そこから発展したのとは違う特質をもっていよう。

そのようにコミュニティの一つ一つの違いを理解し、そこに協同の息吹く、細かい地域発展の方向が必要なのだと改めて考えさせられた。

